

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第18号

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代

鹿児島県内における中世のトイレ遺構
—科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡

令和6年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2025. 10

『縄文の森から』第18号 目次

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター・・・・・・・・ 1

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代・・・・・・・・ 39

鹿児島県内における中世のトイレ遺構 —科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人・・・・・・・・ 45

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡・・・・・・・・ 57

令和6年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代

The Suruga Bay-type pottery fragments excavated from the Komaki site in Kanoya City

Kitazono Kazuyo

要旨

鹿屋市小牧遺跡では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の駿河湾系土器片が出土した。この土器は、九州でも類例が少なく、南九州で出土した初例のため重要な資料である。静岡県東部および九州の土器編年・研究から年代や型式について考察した。併せて九州での出土例を紹介する。

キーワード 弥生時代後期後半～古墳時代前期、菊川式土器、雌鹿式土器、大廓式土器

1. はじめに

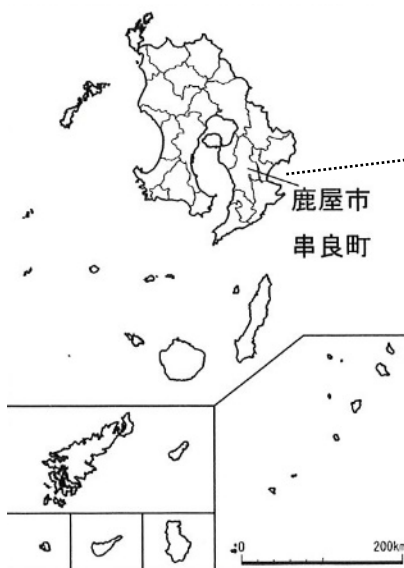
小牧遺跡は、鹿屋市串良町細山田に所在する。笠野原台地の東南端部に位置する串良川左岸の台地上に位置する（第1図）。遺跡の標高は約65mで、志布志湾から約10km遡上した内陸部の遺跡である。旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であり、東九州自動車道建設に伴って平成27年度～29年度に発掘調査が行われた。

筆者は平成30年度・令和2～4年度に小牧遺跡の整理・報告書作成作業に携わる機会をいただいた。報告書は時代ごとに4冊にわたる。そのうち『小牧遺跡3 弥生時代～古墳時代編』に掲載した駿河湾系の土器片（報告書掲載番号：65）について、刊行後に得た情報も踏まえて本稿により詳細に報告したい。

2. 土器の出土状況と特徴

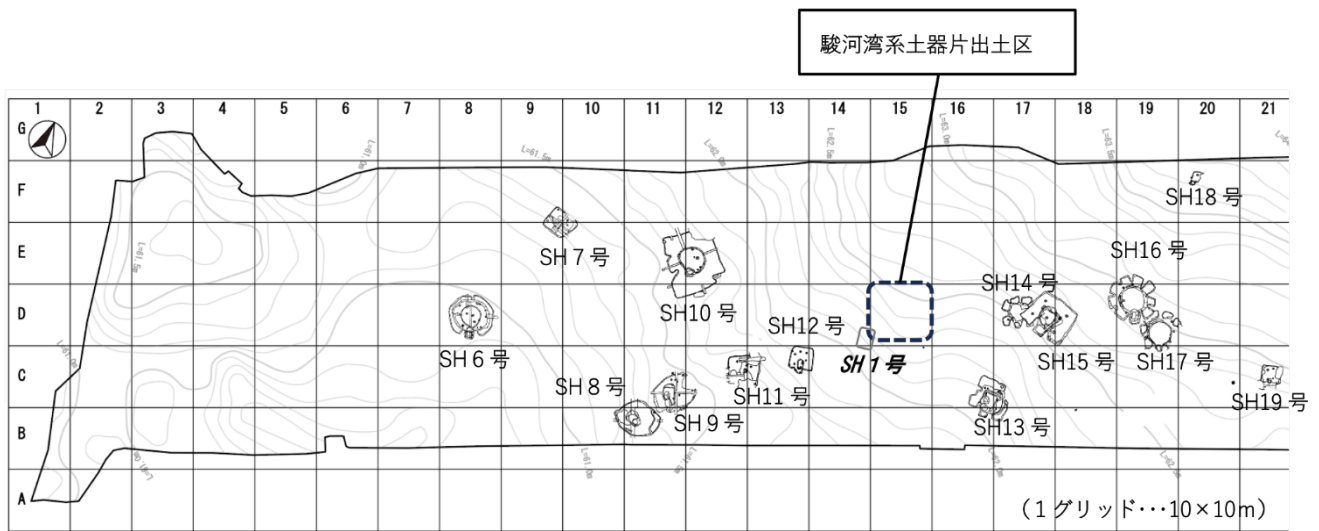
対象の土器はD-15区のIVb層から出土した（第2図）。小牧遺跡においてIVb層はアカホヤ火山灰（約7,300年前）層であるV層直上にあり、縄文時代後期前半から古墳時代後期の遺物を包含する。土器の存在には報告書作成時に気付いた。

この土器片は大きく外傾する口縁部片（第3図）で、内面に結節縄文が施されていたため、初見時は縄文土器の可能性を考えた。しかし、口縁部の内側に縄文が施される例は南九州にはほとんどみられず、ラップ状に大きく開き、口唇部には平坦面がつくられ、端部はわずかに下垂していた。形態は東海地方に分布する弥生時代～古墳時代のいわ



※hinata gis「川だけ地形地図」、Dam Maps「川と流域地図」を使用し作成。

第1図 小牧遺跡の位置



※堅穴建物跡=SH と表記し、斜体は弥生時代に、ほかは古墳時代前期に帰属する。

第2図 小牧遺跡 駿河湾系土器出土状況

ゆるパレス・スタイル土器の壺を想定させた。口唇部は平たく、棒状の浮文が1つ確認できた。また、軽石を含む明るい黄褐色の胎土は焼成もよく硬質で、本遺跡で出土した縄文土器の特徴とは大きく異なった。

そしてこの土器は報告書作成における遺物指導を通じ、形態・施文法・胎土の特徴から、静岡県駿河湾周辺の弥生時代後期～古墳時代前期の土器に該当する可能性を知った。具体的には駿河湾東部の菊川式土器（弥生時代後期）と、同じ系統で時期の下大廓式土器（古墳時代前期）で器種は壺である。なお以下の文中では型式名より「土器」を略する。

この土器の出土地点の周辺には弥生時代の堅穴建物跡1号と古墳時代の堅穴建物跡12号が検出されている。表1にD-15区を中心とし、C～E-14～16区の駿河湾系土器出土層と同じIVb層出土の土器についてまとめた。このように周辺の同じ層からは弥生時代～古墳時代の遺物

時 期	型式	報告書掲載No (器種)	備考
弥生早期	高橋Ⅱ	18・21 (甕)	
弥生中期前半	入来Ⅰ	27・29 (甕)	
	入来Ⅱ	40 (甕)	
弥生中期後半	須玖Ⅱ	71・73・75 (壺)	掲載外の破片あり (3点)
弥生後期	高付	51・52 (甕)	
古墳時代初頭	古式土器器系	560 (器台坏部)	畿内型模倣品
古墳時代前期	古式土器器系	540 (布留式模倣甕)	
		543 (二重口縁壺)	
		565 (小型丸底壺)	
		566・567・569 (ミニチュア坏)	
	東原	551 (壺)	掲載外の破片あり (30点)
古墳時代中期	辻堂原	—	掲載外の破片あり (4点)
古墳時代後期	笹貫	—	掲載外の破片あり (4点)

※斜体はD-15区IVb層出土

第1表 小牧遺跡D-15区周辺IVb層出土土器一覧

が混在して出土しているため、当時は出土状況による時期の判断が難しかった。土器片から推測される形態は、南九州の弥生時代中期後半の山ノ口式の広口口縁壺に最も近かった。そこで弥生時代の遺物の項に掲載した。

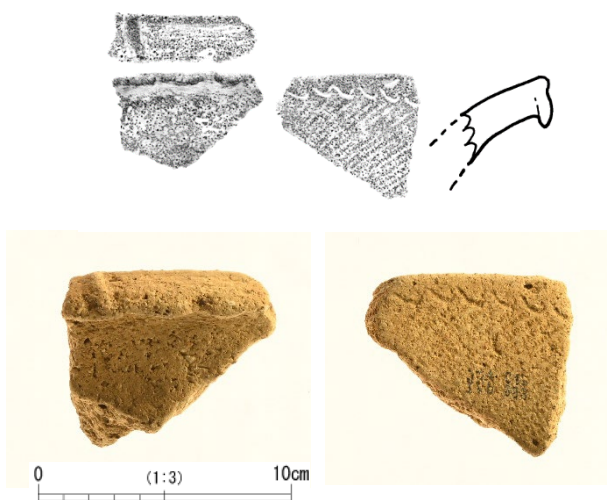
3. 駿河湾系土器の編年について

小牧遺跡で出土した土器は、単純口縁の細頸壺に該当すると思われる。そこで、小牧遺跡の出土例に関連する駿河地方の土器について、単純口縁壺に着目して帰属時期と分布の傾向に併せて、形態と施文の特徴を紹介したい。

①菊川式土器 (第5図1～3)

弥生時代後期後半に帰属し、分布域は静岡西部の中・東遠 (大井川以西、天竜川以东) である。典型的な菊川式の壺は太田川流域 (袋井市・磐田市) を分布の中心としているが、その模倣品は、南関東 (相模西部から武蔵にかけての地域) からも出土している。

口縁部の形態については、古段階はラッパ状に開く折り返し口縁のものがほとんどで、新段階になると出現する単純口縁のものは口縁部が内湾気味である特徴をもつ。施文部位は口縁部内面と肩部で、縄文原体を使用したものと楡



第3図 小牧遺跡出土駿河湾系壺実測図および写真

状の原体を使用したものの2つに大別される。縄文(LR, 結節), 櫛刺突羽状文, 扇状文などがある。

②雌鹿塚式土器 (第5図4)

菊川式とほぼ同時期にあたる弥生時代後期から終末期の土器形式として駿河湾東部に分布する(渡井 1997)。雌鹿塚式と菊川式の単純口縁の壺の法量・文様帯の位置・施文方法, 器形などから並行関係を考察した岩本氏の研究があり, 時期が下るほどに菊川式の影響を濃く受けることが示唆される(岩本 2010)。単純口縁壺の口縁部形態は菊川式の影響と考えられる内湾するものに加えて, 外反するものもある。渡井氏は『淹土遺跡』報告書中で, 「口縁端部を肥厚させて明瞭な端面を形成するもの。その端面には棒状の浮文や縄文を施す場合が多い」タイプを広口壺Dに分類し, 雌鹿塚式の新段階に比定している(1997 渡井)。

③大廓式土器 (第5図5～7)

古墳時代前期に帰属する。静岡県東部地域の古式土師器に該当し, 外来系土器の搬入の始まりを最初の段階としてI～IV式のIV期に編年される(渡井 1996・1997, 篠原 2007)。分布域は, 駿河湾沿岸部または大井川流域が中心である。古段階(大廓I・II式)は駿河地方とその周囲に集中するが, 新段階(大廓III・IV式)は南関東へと分布を広げる。有文の単純口縁壺は口縁部内面や頸部～胴部文様帯を有し, 結節縄文を施す。口縁内面や頸部～胴部文様帯中に円形の浮文を施すものもみられる。単純口縁のものは外反し

ながら開く。胎土の色調は淡黄白色～淡橙白色で特徴的なものである(2000 岩本)。

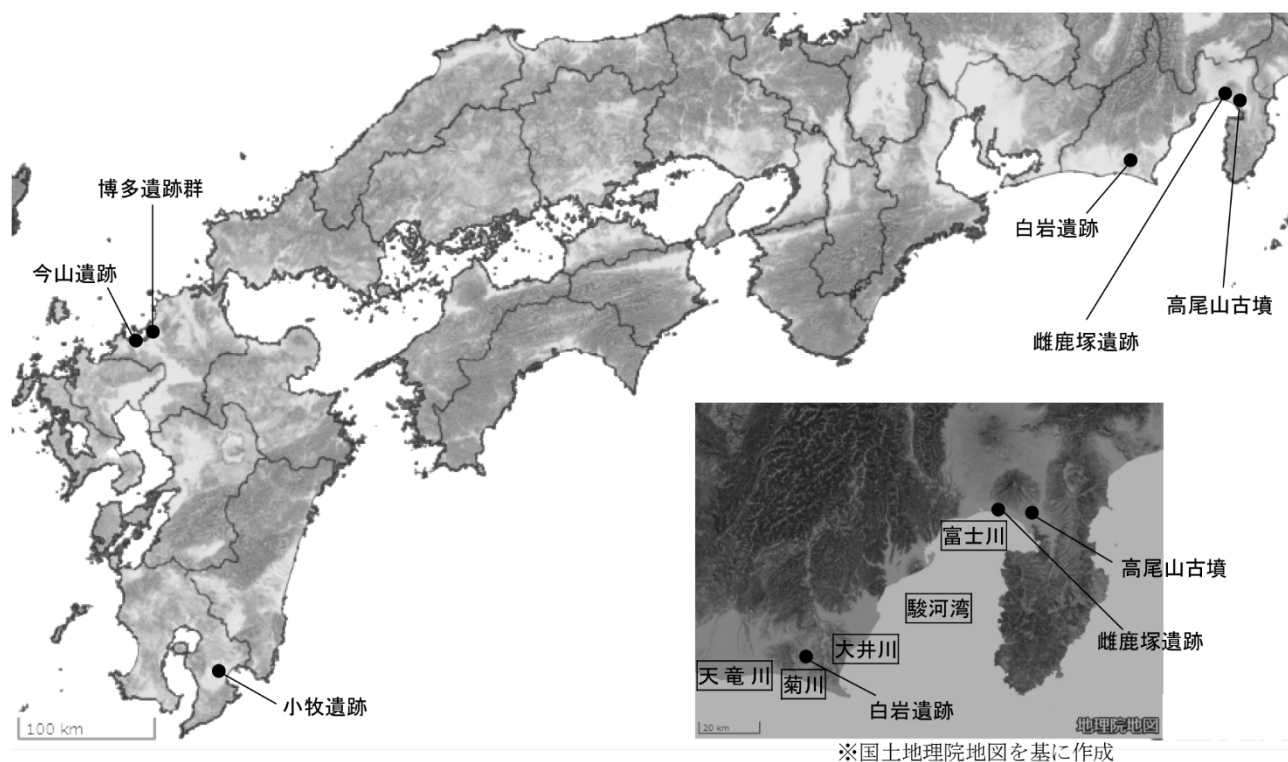
4. 九州における駿河湾系土器の出土事例について

駿河湾系の弥生時代後期から古墳時代前期の土器は, 駿河～南関東へ拡散することが知られる。そのため駿河湾周辺から西の出土例は少ない。そして九州における出土例は, 現在のところ福岡市博多湾周辺に2例がみられるのみである。2例ともに小片で全体形がわからないこともあり, 帰属時期や生産地の断定が難しいことについては小牧遺跡の例と同じである。

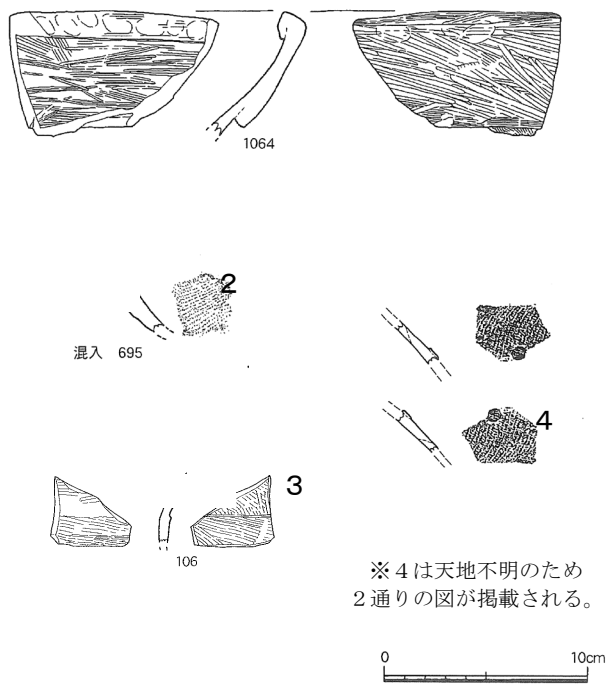
①博多遺跡群 第203次調査 (第6図1～3)

竪穴建物跡(SC091000)から複合口縁壺の口縁部片が, 後代の柱穴埋土中から甕の頸部片が出土した。(第6図1・2)。

1は大廓IV式であるとされる。口縁部内側を内側に折り曲げ肥厚させる。無文で, 器面は内外面ともにハケメ調整後不規則なミガキを施す。赤褐色を含む明橙色の胎土である。報告書第IV章のまとめにて, SC091000について出土土器の帰属時期の多くが北部九州編年のⅢA期古層(古墳時代前期中葉)であるとされる(2021 久住)。2は古墳時代前期の遺物として報告される。外面に緻密な縄文を施し, 白色粒を多く含む黄橙色を呈する胎土である。同調査他にも畿内や丹後・丹波, 播磨, 瀬戸内地方などの広範囲の土器がみつかっており, 交易の拠点であったことが窺える。



第4図 掲載遺跡位置図



第6図 博多203次調査出土土器（1～3）
今宮遺跡下段出土土器（4）

南九州産とされる土器も報告され、うち1点は外反しながら開く甕の頸部片で、外面には屈曲部を始点として刷毛によって掻き上げている（第6図3）。屈曲の角度や調整の特徴から東原式に該当すると推測される。

②今山遺跡（福岡市）第8次調査（第6図4）

包含層から壺の肩部片が出土している。

4は薄手の小片で、外面に緻密な羽状縄文を施し、ボタン状の円形突起を貼り付ける。報告書中では関東南部の土器であることが推測され、関東南部の弥生時代後期の弥生町式～前野町式である可能性が示されている。弥生町式・前野町式は在地土器との混交によって変容した菊川式系統の土器である。なお、弥生町式・前野町式は弥生時代後期後半には雌鹿塚式との関連がみられるとされる（安藤2015）。

5. 小牧遺跡の駿河湾系土器の帰属時期について

小牧遺跡出土土器の施文法の棒状の浮文や口縁部内面の結節縄文は、菊川式・雌鹿塚式・大廓式すべてにみられるものである。菊川式の単純口縁の細頸壺は内湾して開くものに限定され、外反するタイプは折り返し口縁となる。一方小牧遺跡出土土器の口縁部は外反しながら開き、口縁端部はわずかに垂下するのみであるため形態には違いがある。このような口縁部形態は雌鹿塚式～大廓式に通じる弥生時代後期から古墳時代前期の駿河湾東部の土器の特徴に類似し、胎土の色調などの特徴は大廓式に近い。

表1に示したように、この土器の出土地点であるD-15

区IV b層周辺からは東原式や古式土師器系の古墳時代初頭～前期頃の土器が多く出土している。また、小牧遺跡から検出された竪穴建物跡の多くが古墳時代前期の東原式土器を伴った。

先述した土器の特徴と出土した状況を併せて判断すると、本稿対象の土器は大廓式に該当すると捉えるのが自然であると考ええる。また静岡県東部の駿河湾周辺からの搬入品の可能性が高い。

6. まとめ

小牧遺跡は志布志湾から肝属川河口に入り、支流の串良川を舟で遡上してたどり着ける最終地点近くの高台に立地する。弥生時代中期後半以降から古墳時代前期後半にかけて、北部九州産の須玖Ⅱ式の丹塗りの広口壺、熊本平野の布留式模倣甕、宮崎平野の甕・壺の搬入が認められ、広範囲での交流が窺える遺跡である。

本稿に紹介した駿河湾系の土器片の出土は、肝属平野に高塚古墳が築造される時期より若干前に、平野奥の高台に東海地方を含む広域に関わりをもつ集落があった可能性を示すと考える。しかし本来の分布域から乖離した場所で1点のみの出土事例となり、西日本での出土例を探すことすら難しいため伝播の経路はわからない。今の段階でこの地域間に交流・交易があったかを知ることは困難である。

本稿で紹介した駿河湾系の土器は、口縁部の形態のみではなく、胴部の張り具合や胴部稜の有無などのプロポーシオン、肩部文様帯の在り方などから産地や帰属時期がより詳しく分かる。既に報告書を刊行した遺跡の土器片のなかに類例はないだろうか。そして今後の発掘調査で、残存率の高い資料が周辺に類例として加わることが待たれる。

【引用参考文献】

- 安藤広道 2015「IV各地の弥生土器および併行土器群の研究 関東」『弥生土器』ニューサイエンス社（佐藤由起男編）
- 岩本 貴 1995「菊川式土器における編年上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立 10周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩本 貴 2000「大廓式大型壺の転用」『研究紀要』第7号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩本 貴 2010「雌鹿塚式の壺の形式変化について」『研究紀要 第16号』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩本 貴 2012「浮文の法式 東遠江～駿河～伊豆北部の弥生後期～古墳前期の壺を中心に」『研究紀要 創刊号』静岡県埋蔵文化財センター
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2018「九州島の古式土師器」の並行関係―弥生時代終末期～古墳時代中期初頭の九州島における広域編年―『集落と古墳動態Ⅰ 第21回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集』九州前方後円墳研究会

篠原和広 2007「太平洋側（静岡県）」『考古学ジャーナル 2
月号 古墳出現期の土器交流』ニューサイエンス社
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古 6 号』鹿児島
大学考古学研究室
松崎大嗣 2017「薩摩・大隅の古式土師器と在地土器」『九
州島における古式土師器 第 19 回九州前方後円墳研究
会長崎大会発表要旨集』九州前方後円墳研究会
松崎大嗣 2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学
研究』第 18 回号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究
科
渡井英誉 1996「東駿河における布留式併行期の様相」『静
岡県考古学研究』28
渡井英誉 1997「土器編年」『滝土遺跡』富士宮市教育委員
会編文化財調査報告書（23）
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『白岩遺跡・白岩
下遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
第 220 集
沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼
津市教育委員会 第 51 集
沼津市教育委員会 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』沼
津市教育委員会 第 104 集
福岡市教育委員会 2005『今山遺跡 第 8 次調査』福岡市埋
蔵文化財調査報告書 第 835 集
福岡市教育委員会 2021『博多 170—博多遺跡群 第 203 次
調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1405 集
（公）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
2022『小牧遺跡 3』（46）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第18号

発行年月 **2025年10月**

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 18 CONTENTS

Introduction of excavated materials at the Hoshizako site,
Kajiki-cho, Aira City (2)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

The Suruga Bay-type pottery fragments excavated from
the Komaki site in Kanoya City

Kitazono Kazuyo

T Consideration about medieval toilet remains
in Kagoshima Prefecture

Hiramine Hiroto

The emergence and materials for flint
in Satsuma and Osumi

Fujiki Satoshi

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
6nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2025

研究紀要・年報

縄文の森から

第
18
号

二〇二五

鹿児島県立埋蔵文化財センター